

智慧の光



林化法様

智慧光の巻



御遺文

智慧光

智力の信仰

佛知見啓示

宗教意識にして正しく客體の本質性能を悟達證明する事を得るを啓示とす。即ち客體との關係に正智見開展して客體の本質眞理示されて其眞理を悟入するの義なるが故に正智見の眼なくば菩提の正道焉ぞ夫れ進行するを得ん。此正智見の開示は是宗教生活の眼點にして是より神の中の生命に進むを得べし。

佛教には如来は一大事因縁を以ての故に出現したまふ。即ち衆生の佛知見を開示して佛の正道に悟入せしめんが爲なりとは大乘圓滿の教なり。一大事因縁とは本來主體と客體に關係の一大元理は絶對精神態の阿彌の唯一本體は一方には一切智能に發展し産出せられたる世界の個人衆生の心性にして本自正因佛性として神的性能具備す。また一方には本體には個々の一切の心機を高等に開展し解脱靈化せし

ひべき勢能を以て衆生と關係を結合せんとする理性あり。之を縁と云ふ。因とは正因佛性として一切衆生は悉く理性ありて、客體と關係すべき性能あり。喩ば木に火の性能ある如し。縁とは客體には一切を解脱靈化すべき性能あるは、火の木を燒くが如しこの關係によつて、衆生が知見を開示して、菩提聖道に進入する故に一大事の因縁の故に世に出現したまふと。

正因佛性 宗教意識の設定 神的衝動なり。佛性即ち神的衝動は自ら客體の内容を憧憬しつゝ、客體との感應を得んとする衝動にして常に、よりは進んで高度の意識に進勝するものなり。この神的衝動を佛性の性能として、客體との關係をなす。この感應する處の機能は一にして、能感と能應の本質とは、一機能の主客兩方面にして譬へば木を離れたる火に非ず、火を離れて木の燒くことなきが如し。故に主體即ち自己の心機を離れて、外に恩寵の感應を求め、恩寵を離れて自己のみにしては、決して佛性見開示し、悟入する理あることなし。自己の精神外に啓示を求むべからず。精神と云ふも肉剛心緣慮心を云ふに非ず、即ち絶對心と致一なる精神をいふ。

縁因即ち啓示材料

啓示は自己の心機に發現して、初めて自己の啓示とすれど、歴史に現せる經史に現れたる啓示は外部の啓示にして、未だ自己に關せざるなり。他の木の火の如く、自己に發現するに非ざるよりは、自己の功能のあるなし。例へば人ありて三昧の中に淨土の二報を感見し、常に阿彌の光攝を被るとの話頭、或は天悟徹底の說話をいかげど微に聞得るも、それは唯外部の事にして、自らに關せざるなり。正しく自己の心機に顯現して初めて啓示と云ふべし。其要素は即ち材料は、禪門の如く四十八則一千七百の公案の如く、一の公案に專一丹心工夫し、一心凝神して、一旦廓然として悟入するあり、或は教觀あり、一念の心を觀じて三千の理を觀ずるもあり。或は法界觀一眞法界を觀するあり。また心佛衆生是三無差別三平等觀に靜慮するあり。何れも要する處自己の

三

心機に、その關係によりて、開展して其眞理を知見し悟達するにあり。心機開展を要するなれば、何の材料に縁るも可なりと謂ふ類も有れども、若し心機鍛鍊して具るは然らば、宗教としては、神的動機によりて、宗教活動を要せんには、唯一の恩寵に縁るの外に、正知見興へ得らるゝ道なきを示さん。方便の門多しと雖も歸する處唯一のみ。宗教關係にして其縁する處即ち材料は、佛と問は干屎橛とし、又は麻三斤と答へたり。それは一切物として佛ならざるはなし。非門より云は何れが之眞の佛ならんれば又然るべし。然れども眞面目なる宗教としては、神聖唯一の恩寵に縁る外正知見開示悟入する道なきを信するに如かず。

如是くなる時は洒々磊落、若し無念の知見を得れば則ち愛惡自然に淡泊にして、悲智自然に増明すとの如く是不可なるに非ざるも、客體に對する畏敬の念を缺き、すべての感情的信仰の要素缺けて、冷落落莫に流れ乾燥無味となり、一神的活動新鮮なる活氣を失ひ、無限に對して抑損す。神的憧憬とは客體に歸命信賴し甚深なる悲壯の感動を生ずる如きの感情。信仰の動機と成るべき風流雅致の宗教意識を作るには可なり然れども神聖正義恩寵により至眞至善至美また神能壯快なる意識を作るには不適當なり。

善導大師は觀經及び般舟經等に依りて、客體の眞金色圓光徹照し端正なるを思想觀察することを教へ給ひし。廬山の遠公も阿彌陀佛を專想凝神せしこと傳に見ゆ。

宗教としては初めに感覺的神的表明は、最も純粹なる宗教意識を作るに適すべき。客體に對する觀念には、阿彌は本質は精神態なるも關係についての觀念には可成程は圓滿なる客體性能を表明すべき表示を要す。感覺としては阿彌陀佛眞金色にして圓光徹照し端正無比なりと想ふべし。また阿彌陀佛は神聖態にして正義と慈悲と全智全能なる威神無極神なりと觀ずべし。

五

啓示の眞否

六

楞嚴起信等に行者加行の中に在りて 魔の爲に障礙せらるゝことを明す。楞嚴には 色受想行識五陰に各種々の妄象顯現して 人の精神を惑亂すと云ことを説けり。また 諸の魔外道鬼神の爲に惑亂せらるゝに 若くは坐中に形を顯して恐怖 或は端正男女等の相を現す 當に唯心を念すべし境界則滅して終に惱まされずと。或は天像菩薩像を現し 或は如來像相好具足し 若しは陀羅尼を説き或は宿命過去の云何を知らしむ 或は世間名利の事を貪着せしめ 又人をして羨嘆り羨喜んで性常準なく 或は多く慈愛多婬多宿多病にして 其心を懈怠ならしむ等。これ専ら神的觀念の中に於て或は身體と精神との不健全に訓練さるゝ爲にして 精神には専ら凝神靜慮するに或は曾て 印象したる種々の象相の再現するに外ならざるなり。正しく一の要素ありて 夫れに對する觀念ならば本より正當と云ふべし。然るに期せざる處の物象が發現するは不可なり。是全く修練の未熟なるとまた腦の性質の自然ならざるによる。惡魔と云ふも 外に在て爾るに非ず。全く自己精神の用意の完全ならざるなり。若しよく碎屑精修熟達する時は 念に隨ひ 意志に隨て 自在なるを得べし。

魔と云ふも自己の精神の未だ調適し熟達せざる爲にして斯の如きの業相魔障と名づくべき精神の妄想的作用を碎破するに非ざれば 純粹なる精神態として豫期する處の客體の本質を感應し 致一すること能はざるべし、注意すべき事は たとへ豫期するところの本質眞實に發見することを得るも 其獲得に悦びて 内心緩々する如きは 是魔といはざるべからず。若し何にしても 全く自己の神的觀念の啓示たる價值ありて 宗教生活の眼目と成るときは 是魔とか或は妄想といふべからず。

或は精神の錯覺し易きと 或は病的なる妄覺なるあり。幻覺より起る等はすべて之を從來魔と傳へ來れり。

七

大乘佛教は啓示

八

小乗教の朴質なる意識より進み來りし大乘佛教は 最も理想高遠にして 幽玄深遠なる理に富饒なる宗教意識なれば 現實世界を超越したる精神界の内容 即ち觀念世界の方面のみを示せり。故に其所説の要素は概して 三昧定中の内面を説明したるものにして 其内容を窺はんとするには 三昧に入て觀念世界に通入するに非ざれば 其本質の義に悟達すること能はざるは大乘佛教の特質なり。華嚴は 華嚴三昧海中の内容にして 法華は法華三昧の客體の表明にして 何れも其内容は三昧定慮に入るに非ざれば窺ふことを許さず。故に蓮華藏世界に遊入して 理事無碍法界の また盧舍那の宮殿に昇らんよ欲せば 華嚴三昧の寶輪を要せざるべからず。

靈山會上に 親しく法身具相三十二 圓滿に大衆の爲に圍繞せられて 常恒説法の啓示を獲んとせば 佛知見を開示せざれば 其本質意識に達入するなし。故に大乘佛教の眞實内容を識らんと欲せば 須らく精神の内容に入るべき 三昧によらざるべからず。

昔惠遠法師廬山に在て白蓮社を結び 専ら精神を西方の聖客に凝神し 至精至微幽を極め精を盡して 多年三摩耶の中に於て彌陀の聖貌を觀じ 淨土瑠璃寶地 及び瑠地水流光明妙法を演暢するを觀じ 其他此會に關與するもの高僧逸士 遠公の高志皎潔なる志操を慕ふて 同じく淨業を精練し 一心純熟して或は聖顔を感じ 淨境を觀見するもの甚だ多し。又南岳慧思禪師定中にあつて 彌陀彌勒の摩頂を被るが如く 又隋の智者大師法華三昧を行して經を誦し 藥王品の是眞精進是名眞法供養如來と云ふ文に至つて 即ち廓然として大悟して靈山の一會儼然として未だ散ぜざるを見る。

啓示

天然教は 神の啓示として信ずる處は本より幼稚にして其感覺相に或はトイカミの

九

神カ、リに人の神は托して豫言を示す 或は物教などと言ひ 又儒教の龜竹筮に神ト筮に啓示せり。易の理の如きは是儒が啓示なり。何にしても天然の幼稚なることは論を俟たず。

儒に國家將興必有禎祥國家將亡必妖孽見ニ乎者龜動乎四體禍福將レ至善必先知之不善必先知之故至誠如レ神

小乗教 資糧位煥位に別總念所觀によつて 能く似解の十六諦觀を發し 佛法の氣分を得譬ば火を鑽るに煥起る如し。又春陽の煥發るが如し。慧もて境を鑽れば 相似の解を發す。解は即ち煥に喩ふ。又春夏華草を集めば自ら煥生するが如し。四諦の慧をもて善法を集め 善法薰積して慧解起ることを得 故に煥と云ふ。頂法は轉た分明に煥の上に在て 山頂に四方を瞻るが如し。忍法は似解增長し自ら忍可す 世第一は有漏の極なり 精神世間を超越せんとす。

見道に見惑を斷じて眞理を見る。修道思惟して四眞諦を緣す。無學道眞を研て惑を斷じて學とす。眞窮り惑盡を無學道と爲す 小乗の客體との關係に偏眞の無我の理を見るを開示して悟入するにあり。法華には天台の釋によるに 三諦の境を觀する三觀の慧を用つてす 不思議の境を觀るに 謂く一念の心を觀するに三千の性相百界千如を具足して滅すること無し。

進化發達せる精神宗教にては 客體との關係に 知見を啓示せらるゝも 觀念的に啓示せらるゝが故に 先づ客體の要素は聖典に示さるゝ 例せば無量壽佛眞金色にして相好光明の相を聞き 或は形像に表明せるものを寫象し 之を反映して客體化して啓示とする如く客體の本體は本より精神の對象にして 之を法界身と名づく。感覺的の妙色莊嚴といふも 經驗界の感覺にあらず。天然教の如く五官に對する感覺に默示せらるゝとは異れり。

暫く天台の三諦に觀する三觀 華嚴に理事等の四種の法界觀 理論的觀念觀にして 宗教客體の啓示としては 不適切ならんも 其大意を述べば

華嚴法界觀門

眞心即ち一切を統一せる一眞法界は總じて萬有を該ね即ち之一心 然るに心體萬有を融して即ち四種法界と成る。一に事法界界は分の義。一々分齊差別あるが故に差別二に理法界とは性の義無盡萬法本同一性の故に。三に理事無碍法界 同一の本性と事物と無碍の故に。四事々無碍法界 一切差別の萬法一々如性融連重々無盡故に。

法界觀三門

- (1)眞空 (2)理事無碍 (3)事々無碍

(1)眞空觀

低度なる理論的意識より漸次に進歩發達して また低度の意識の執を排斥して また本質を覆ふ所の種々の素質を除いて 終に本體を顯示す。

眞空とは是實體即ち精神一元理の體

天然の意識妄念慮に非ざるが故に眞と云ふ。物質に簡て空と云ふ。質實體の本質なる絶對精神なり。

(一)會色歸空 曰く色とは物心二質 空とは本體即ち眞心態

1 色不即空以即空故 此顯動態は 外道や二乗が執する如く 斷滅の空に歸するものにはあらず。外道はこの色心は終には大虛に歸すると 二乗は形は苦の本智は雜毒なり。この身無と無意識は涅槃なりと。今は其様なる斷空に非ず。今云ふ色は妙有の色なれば 色には本體別にあざれば 畢に眞心に歸すべき理性あり。

2 色不即空以即空故 凡夫や初心の菩薩の執する處の物心の二現象は即 空の本體に非ず 是に三義あり。

一、空は無邊際の義 無邊の本體と有限の理象とは別體

色法は有限にして本體は無限なり

二、無壞義

本體は無壞にして

色法は規定の爲に縁離れば離散す

三、無雜義

本體は絶對眞心質にして

色法は混雜質にして本體は然らず

この三義を以て實體と顯動體とは簡別せざるべからず。然れどもこの現象態は實體を離れては本質あるものに非ず。實體より現象の色なれば色は本體なり。

3 色不即實以即實故 色は人の五陰六根六識六塵十二入十八界十二因縁四諦乃至佛一切種智に至るまで若しは物と心と二現象と成りし上は 實體には非ず。故に不即空 然れども實體を別にして 本質あらざれば即ち空と云。

4 色即空 顯動色法は依他にして實性なり。即ち圓性の本性の現性に外ならず。六道衆生及十方佛菩薩一切の色法 即實體を離れて本質あるに非ず。

第二 空即色觀 空は實體色は現象 色は顯動二質

1 空不即色以即空故 即色外道や二乗が執する斷滅の空にては顯象卑しといふべからず、本體には非ず 真空は妙有の本體なり。

2 空不即色空即色故 空理は青黄等といふべからず 形象に非ず 然れども現象は實體を離れたるに非ず。

3 空不即色空即色故 本體は所依にして他に依屬せず 顯現象は本體に依屬す故に能異 能依所依一體故即。

4 空即是色 實體と現象とは本一元理なり 眞如自性を守らずして現象界に出たるが故に。

第三 空色無碍觀

物心二現象は深く觀じ來れば 本體有るに非ず 同一本質の現象なるが故に 外道二乗の如くに斷空に非ず。真空の實體の色の現象なれば 色を盡さざれば真空顯はれざるに非ず。故に菩薩はこの顯動界と同時に實體とは表裏の二方面は同時に觀念す。

第四 混絶無寄觀

實體は現象と云ふべからず。實體は現象なりとせば天然教と成る。凡聖同見と成る。二態全く異ならば凡聖永く隔り 凡は聖と成るを得ず。即ち云ふも離と云ふも眞理を失ふ。絶對本質即ち眞理は非時間非空間非一切法非物心非活動絶無寄般若現前言語道斷心行所滅 智を以て知るべからず唯證のみあつて相應す。心境冥合 冥心智を遣り方に茲に詣て境明かに 唯行のみ到るべし 解の境に非るが故に 冥合するは眞行 行即境の心 動念すれば法體に乖き正念を失ふが故に 真空理性本自如然 情亡智泯是本眞

(2) 理事無碍觀

前に已に一切の妄情を排除して本眞 即ち絶對眞心 本質を顯示して 已に未だ眞如の妙用を顯はさず。本質には妙用あり。理の本體と事の妙用をば煥然雙融本體に屬する活動なれば互に融鎔 互に徧す。

十門あり 二門互融 互徧 存亡違順

1 理徧於專門

能徧の理絶對 所徧の事個々差別 淨染互に爲縁起 初起滅の事は 相は理體を離れたるものに非ず 法性一切事に徧せざるなし。

2 事徧於理門

能徧の事物は有限なり 有限の事物は無限の理體に依らざるべからず 事は本體なるが故に 事物の顯動の自中存在の本體を觀すべし。

3 依理成事門

顯動の事物に別に本體無し 實體に依て成る事を得 依縁縁起自性なきが故に 眞如隨縁の故に波の水に依て立つ如し 如來藏に依るが故に生死あり 如來藏に依るが故に涅槃あり。

4 事能顯理門

影像の鏡明を表すが如し 識智の本性を表す。信論に無明に因て眞覺とす 事相の虚妄なくば眞理なるもの有るなし 相待に依て

絶對を顯す。

5 理奪事門 波は悉く水なり されば水の外に波なきが故に 本體の外の顯動なし。

6 事能歸理門 眞理隨緣成事 法身流轉五道名づけて衆生と云ふ。十方界唯顯動のみ見て本體を見ず。

7 眞理即事門 眞理事に即したるに非ずば解脫能はず。顯動態を離れて眞理即本體を求むべからず。小乗外道の如く超然主義が顯動を措て超然界に本體を求むべからず 顯動の自中存在なり。

8 事法即理門 顯動には本性なし舉體即眞の故に 衆生滅して眞顯はるゝに非ず 實體顯動態に非ず波と水とは異なるが如し 眞妄同一ならば解脫の要なきに至る。

9 眞理非事門 實體と顯動とは 二質異なるが故に事法即眞理ならば また解脫の要なきに至る。

(3) 周徧相容 事々無碍

一々事皆如理の故に融通なり。然るに單に事相のみに約せば 彼此相碍る 本質に融通するが故に 相碍ることなかるべし。

事如理融 故に十門無碍。一切事々物々は表面より見れば 個々別々の象と用とを現するも 其内面に不可割の理性に規定せらるゝなり。故に理として融通すべし。五理謂薄徧 相容交參 彼此涉入 自在 同時互爲能所

1 理如事門 眞理全く事々と爲すが故に現象の事物は本質眞理の故に表裏一體の故に

2 事如理門 一々事物は内面不可割に無限にして空間と時間に徧する實體との關係

3 事合理門 現象の事物が眞理と非一の故に一事に存して能く廣く容る。一微塵中に無盡の法界を容る 内面不可割の故に 俱に一微塵中に存て現す。

4 通局無碍門 理と事とは非一即非異の故に一切塵に徧入す。非異即一の故に全く徧十方 一位を動せず 即ち遠くも即ち近なり。

5 廣狹無碍門 事と理とは非一即非異の故に 一塵を壞らずして能く廣く十方刹土を容る 非異即非一の故に廣く十方世界を容れて微塵も大ならず。

6 徧容無碍門 一人が百人に寫象せらる 一塵を一切に望も博徧即廣容。攝入無碍門 一切を一法に望み一人の心の百人を寫象す。

8 交渉無碍門 一切は一に入り一は一切に入り交渉無碍。相互無碍門 我に餘の敷多を攝したるまゝ 佗の寫象中に在り 佗がまた敷多を攝したる寫象のまゝが自に入る 相互に無碍と云ふ。

10 博融無碍門 一切一も皆同時に交互に相望み 前の人を融して展轉して相由る故に一及び一切を出ずして 互に相望 總別同時に重々無盡なり。

初真空觀は客體と現象とを分別と致一との兩方面を顯はし 本體より現出せられたる現象は本體の自性に非ざれば 一々に之を排除して 終に眞體は言語道斷心行處滅唯深く證入したる精神のみが致一冥合することを觀じ。

次に本體を離れたる顯動態なく 本體と顯動との關係を種々の方面より論理的に觀念すべきことを明し。

三に一切の事物は表面は孤立の如くなるも 内面に不可割の同一の本體に關係せるが故に事々物々は相互に相容交渉して 無碍に融通すべき理性あることを觀す。

此の三觀は本體と顯動との本體及性能には 斯の如く關係によりて分別し 致一すべき理性あることを 理論的に意識する觀門なり。